

現代日本語の交感発話の分類に関する考察

肖潔

本発表は、現代日本語の交感発話の枠組み及びその段階性を明らかにするために、交感発話の分類を試みることを目的にしている。交感発話は、イギリスの人類学者マリノフスキーの造語—‘phatic communion’から発展した用語である。加藤(2004)『日本語語用論のしくみ』(研究社)は、交感発話の交感機能について、「情報内容の伝達よりも、安定的にやりとりできる状況を作ったり保持したりすることに重点のある言語行動が持っている作用を指す。交感機能が強い典型的な例はあいさつである」と述べている。従来、交感発話とえば、主にあいさつ言葉のように人間関係に貢献できる言語表現のことを指す。しかし、交感発話においても、交感性の強いものとそれほど強くないもの、言語形式の定型性が高いものと低いものがあると思われる。そのため、本発表は、現代日本語の自然会話を例に考察し、「典型的交感発話」「準交感発話」「疑似交感発話」という三種類に大別できると結論づけた。

まず、先行研究の記述に基づいて、交感機能を「社交性がある」「情報性が低い」「行為目的が弱い」という三つの基本的な特徴にまとめた。次は、この三つの特徴をもとにして、あいさつ言葉ならびにあいさつに用いられる表現を対象に考察した。その結果、交感性の強い例は紋切り型のあいさつ言葉であると明らかになり、これを典型的交感発話と定めた。続けて、あいさつの中によく現れる「感謝」「謝罪」のような発話は、交感性もあるが、発話の行為目的を含む表現であるため、交感発話に間接的に機用していると考えられる。本発表では、それらの発話を準交感発話と定めた。典型的交感発話と準交感発話は、主に交感性の強弱によって分けられるが、疑似交感発話と典型的交感発話は定型性の高低によって区別される。例としては、よくあいさつ言葉と近接して現れる「早起きだね」「お出かけですか」のような雑談の表現である。以上のように、今回は、交感発話の大分類を整理することに留まったが、今後はこの結果を踏まえた上で、より細かな条件に応じた分析に進んでいく必要がある。